

林 尚輝¹: 報告—The 14th International Meetings on Phytolith Research (14th IMPR)
 Naoki Hayashi¹: Report—The 14th International Meeting on Phytolith Research (14th IMPR)

2025年7月14日から7月19日にかけてThe 14th International Meeting on Phytolith Research (14th IMPR)がスペインのバルセロナで開催された(図1)。IMPRはSociety for Phytolith Researchを前身とするInternational Phytolith Society (IPS)が主催し、およそ2年ごとに開催されている。世界各地の珪酸体の研究者が集う貴重な国際会議である。筆者は2018年に武漢で開催された第11回大会以来、7年ぶりの参加となった。スペインでの開催は今回が3度目で、過去には1996年の初回大会(マドリード)と2006年の第6回大会(バルセロナ)が開催されている。今回の会場は、スペイン科学研究高等会議のミラ・イ・フォンタナルス人文科学研究所であった。バルセロナ市街のラバル地区に位置し、カタルーニャ広場(図2)からランブラス通りを歩き、ボケリア市場の少し先まで行くと会場に到着した。学会開催中は、最高気



図3 ポスター会場の様子。



図1 発表開始前の待機スライド。



図2 カタルーニャ広場からの風景。

温 30℃前後で天気の良い日が続いた。湿度は低い屋外にいると日差しが強く、日本にいるのとほとんど変わらず、非常に暑かった。筆者の旅程は15日から18日であったため参加できなかったが、14日には、珪酸体の形態計測や自家蛍光に関するワークショップが開催されたようである。また、19日にはフレシネ・ワイナリーへのエクスクーションがあった。

研究発表は57件の口頭発表と、28件のポスター発表があった(図3)。口頭発表は、考古学や地質考古学のセッションで最も多く34件、古環境学のセッションで17件、そのほか、植物生理学や植物珪酸体の形態に関する発表が6件であった。筆者はVegetation history in Tanegashima Island, Southern Kyushu, Japan over the past 100,000 years inferred from phytolith assemblagesというタイトルで、大阪公立大学の井上淳先生との連名でポスター発表を行った(図4)。日本からの参加は筆者のみであった。しかし、北海道大学に研究員として所属経験のあるRobert C. Power氏やEmanuele Guglielmini氏が参加されており、日本をフィールドとした研究の話も盛り上がった。同じアジア圏では、中国やインドからの研究者の参加は多数見られ、Nannan Li氏をはじめ数名の研究者とも議論することができた。

集合写真(図5)を見ていただけると理解してもらえると思うが、今大会は若手研究者や女性研究者の参加が目

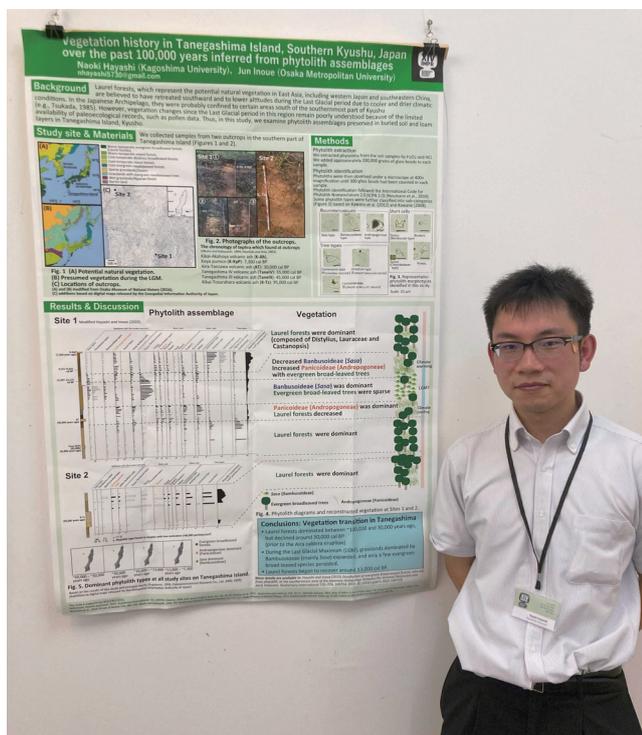


図4 筆者と発表ポスター。

立った。85件の発表のうち約3分の1に当たる31件の発表が学生からの発表であった。また発表件数の多さからもわかる通り、世界的にも珪酸体が考古学分野で最も活用されているという実感を持った。考古学分野では、人類が利用していた植物に焦点が当てられることが多い。そのため、日本や中国では、珪酸体といえばイネの機動細胞由来の珪酸体が有名である。しかし、地域が変われば研究対象も異なり、ヨーロッパや西アジアでは、コムギ連の類に由来する珪酸体、南米ではヤシ科の葉身に由来する珪酸体といった日本ではほとんど知られていない珪酸体が重要視されていた。そのほか、床面の遺構中から見つかる珪酸体から、使っていた敷物についての情報が得られるといった研究は大変興味深かった。



図5 集合写真。

最も議論が白熱したと筆者が感じたのは、珪酸体の形態分類と命名に関してである。近年、世界的に統一された分類と命名体系の基礎として、IPS内の委員会、The International Committee on Phytolith Taxonomy (ICPT)によって、International Code for Phytolith Nomenclature (ICPN)が提唱されてきた。ICPNは純粋に形態に基づくもので、比較的分類が容易なため、専門分野以外の分野の研究者にも広く知られるようになってきた。一方で、植物の系統を踏まえた分類の重要性を指摘する発表もあった。今後も統一された珪酸体の分類体系を目指し、議論が続きそうである。また、2019年にICPN2.0が公表されて以降、多くの研究者が植物珪酸体名を提案してきたが、それらが実際に有効に公表されているかどうかを誰が判断するのかという問題提起もあった。これに対し、ICPTが監修し、正式に承認された名称、およびICPNの命名・記述原則を満たしていない正式に提案された名称のリストをIPSのウェブサイトに掲載する提案があった。筆者としては、日本でよくみられる珪酸体の形態について、どれが命名されていて、どれがされていないのか、すべてを確認するのは限界があるため、1つにまとめたものの必要性を感じていた。分野外の研究者にとっても形態分類の際に大いに参考になると思うので、ぜひ実現してほしいと思う。

総じて、数日間、珪酸体研究の話題に溢れる非日常的で楽しい時間を過ごした。また、多くの国外の研究者と知り合うことができ、実りある大会となった。同世代の研究者の活躍に対し、筆者も負けずに引き続き精力的に研究に取り組んでいく所存である。次回のIMPRは2026年の11月にブラジルのサンパウロで開催予定である。IPSのホームページ (<https://phytoliths.org/>)にはIMPRの情報をはじめ、植物珪酸体研究に役立つ様々な情報が掲載されているので、興味のある方はぜひチェックしてほしい。

(¹ 〒 890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学法文学部 Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University, 1-21-30 Korimoto, Kagoshima, 890-0065, Japan)